

自尊感情の育成に関する実践的研究

-高等学校におけるジレンマ授業を中心に-

学籍番号 159982

氏名 村口 外至

主指導教員 田中 満公子

1. 背景と目的

国際的に比較しても日本の児童生徒の「自尊感情の低下」は叫ばれて久しく、喫緊の教育的課題として挙げられる場面が多い。自尊感情という言葉は一般的な定義付けが非常に難しく、先行研究の多くがその実態を明確にしていない。実態はどのようなもので、またそれらを育成するには具体的にどうすればよいのかといった手立てについて、学校現場での実態を踏まえた実践とともに語られている例は多くない。本研究の目的は、「自尊感情の育成」のための教員の手立てを抽出し、実践することでその効果や課題を検証するものである。

2. 設定の経緯

自尊感情の育成という研究課題に取り組むために具体的にどのような資質能力を伸ばすべきなのかを学校現場における実態から検証した。第1 Semester（2015年6月）で実習校の実態を把握し、研究課題を明確化した後、第2 Semesterでは「わかる」「できる」感覚を生徒が実感できる工夫を取り入れた授業（24コマ）を実践した。結果として、知識に偏らない他者との関わりを通じた学びなくして自尊感情の育成は難しいという仮説を得た。これまでの実践の結果と東京都教職員センターによる「子どもの自尊感情や自己肯定感に関するQ&A」を元に、観点①「知識を持っていること」、観点②「自分を理解し、受容していること」、観点③「多様性を理解し、受容していること」、観点④「自分の意見を主張することができること」にまとめ、これら4観点の育成のための様々な手立てを講じ、その効果を検証することとした。

3. モラルジレンマ授業の実践（「真の友情」「尊厳死」）

第3 Semester（2016年6月）の実践では、上記の4観点を複合的に育成するための手立てとしてモラルジレンマ授業を実践した。モラルジレンマ授業は、生徒が主体的には判断が付きにくい葛藤状態へ陥れ、他者の立場に立って考察させ、最終的には生徒自身が判断せざるを得ないような「ジレンマ状況」を提示し、その解決を図るために自由に議論させる授業をさす（平岡ほか2013）。ここでは一人ひとりの生徒が自らの価値判断に基づいて判断し、それを何らかの形で表現できるようになることを目標とした。分析方法として、授業の中で使用したワークシートの記述を元に生徒の思考のパターンを場合分けし、それぞれの背景を考察するという手法をとった。結果としてモラルジレンマ授業において正解のない、つまりオープンエンドな問いに対して判断を下し、根拠をもたせて議論をさせる活動を通して、生徒の自己認知能力が向上することがわかった。

4. 「異文化理解」における授業実践

授業中に生徒が身近にいる人間の多様な価値観に触れながら、自己の主張をきちんと表現することを目標の一つとした。一般的に企業の研修やオリエンテーリングで他人とコミュニケーションを円滑に運ぶために用いられる「ジョハリの窓」を使用した、直接的な自尊感情の育成授業を実施した。「ジョハリの窓」の中の「盲点の窓」を言語化する活動は、直接的に他者から自分の長所を認められることを意味し、自尊感情の育成に非常に効果的であることを確認した。

ジレンマ学習を実践しながら同時に国際理解問題を考えることができる「傘をもたずに」、当時のスーダンの悲惨な現状、報道写真家という職業観、生命の大切さ等これまでにないほど多様な要素を多面的・多角的に考察する力が求められる「ケビン・カーター」といった2つのモラルジレンマ授業を含んだ一連の小単元を実践した。ワークシートの分析から第一判断と第二判断で判断が変わらず、生徒は他者の意見や新たな事実を思考のパターンに取り入れることでより自らの意見の根拠を強固にしていたということが判明した。モラルジレンマ授業を中心とした授業実践を通して、生徒は意見を変えない場合においても、他者の考え方を理解し、受け入れた上で自らの価値判断を信じて回答することができていた。

5. 質的/量的データ分析

すべての実践終了後に「授業に関するアンケート」と「自尊感情尺度」(ローゼンバーグ 1965)の2種類のアンケート調査を元に、自尊感情を育成するための4観点を意識した授業は有効であったのかを考察した。結果からA高校の生徒がモラルジレンマ授業を初めとした授業を通して、一見難解だと思えることにもチャレンジすることの意義を伝えることができた他、生徒たちは自分の価値基準に自信をもって判断ができていたということがわかった。生徒の回答を、①「幸福感」を実感した回答、②「異文化理解」における外国人とのかかわりを意識した回答、③「異文化理解」における地理的な動機付けを意識した回答、④ジレンマ授業によるディスカッションなどを意識した回答の4つに分類することで、モラルジレンマ授業という授業形態が生徒の主体的な授業参加を促し、それまで授業中に意見を表明する機会がなかった生徒まで自信をもって意思表示ができるようになることを示した。2度にわたって調査した、「自尊感情尺度」では3クラスの数値を合算した比較したところ、10項目中8項目において改善の傾向が見られた。

6. 成果と課題

これまでに詳細に語られることのなかった生徒の現実的な思考変遷を分析することで、4観点「知識・自己理解及び受容・多様性理解及び受容・意見主張」の育成が自尊感情の育成につながるという確かな手応えを得ることができた。課題として「なぜ意見が変わらなかったのか」「なぜ意見が変わったのか」という点において考察する際に、生徒が根拠を明確に述べている場面が少なく、筆者の推測の域を出ない部分があった。モラルジレンマ授業を行う際のワークシートは常に生徒の実態に即した改善が求められるだろう。「自尊感情の育成」という命題に対して、自己理解及び自己受容に留まらない、他者との関係性の中での育成の手立てを今後も模索し続ける必要があるだろう。